『強引騎士の幸福な政略結婚』
著：名倉和希
ill：蓮川 愛

　そんなこんなで、とうとう挙式の日がきた。
　純白の騎士服に身を包み、レオナルドは姿見にうつる自分を見つめる。
　花婿としての体裁は整っているように思う。針子が徹夜で仕上げた衣装は、レオナルドの体にぴったりだった。
　レオナルドは一昨日の深夜、国境から王都の実家に帰郷した。待ち構えていたのは父親ドナルドと数名の針子たち。実家に置きっぱなしになっていた騎士服を見本にして隅々まで計り、婚礼衣装を仕立てたらしいが、レオナルドが一度も赴任地から戻らなかったために微調整ができていなかった。そのため待っていたのだ。
　ドナルドが金に物を言わせて集めた一流の針子たちは、「ああ、胸囲が二センチも太くなっています」「太腿も一センチ増ですね」とぶつぶつ言いながらレオナルドの体を弄くり回したあと、サッと去っていった。
　翌日は朝から結婚式当日の説明を受けた。父親から式次第を渡されて段取りを覚えさせられ、新居まで連れていかれて屋敷中を案内され、厳選したという使用人たちを紹介された。その中にジョゼフの専属従僕がいた。
　三十代半ばというスタンリーは、コンラッド男爵家出身らしい。レオナルドのバウスフィールド家とは同格の家だ。なぜ侯爵家の子息の従僕になったのか経緯は話さなかったが、二言三言のやり取りだけで、彼がいかにジョゼフを大切に思い、心から尽くしているかわかった。
「よろしくお願いします」
　そう丁寧に頭を下げたスタンリーだが、その目には「うちの坊ちゃんを大切にしろよ」と脅しめいた光が宿っていた。恋愛の機微にはまったく疎い自覚があるレオナルドだが、スタンリーが発したような好戦的な空気には敏感なのだ。つい受けて立つぞ的な態度で睨みつけてしまったレオナルドを、父親が慌てて引き離す。
「ジョゼフの従僕とケンカしてどうする。味方につけるくらいの気持ちでいないとダメだぞ」
　そう諭されたし意味は理解できたが、レオナルドは売られたケンカを買わずにいられるかどうかわからなかった。
　そしてやってきた結婚式の朝。
　挙式はジョゼフのアシュワース家敷地内にある古い礼拝堂で行われる。代々、その礼拝堂で侯爵家の人間は式を挙げてきたらしい。レオナルドのバウスフィールド家としては、もっと由緒正しい教会を借り切って、大々的に結婚式をやりたかっただろう。金ならある。けれどドナルドは

格上の侯爵家を立てるかたちで場所の選択を譲った。
　とはいえ、かなり老朽化していたので、ドナルドが資金提供して改修工事が入ったと聞いた。ちゃっかりしている父親は、アシュワース家に恩を売ることを忘れない。
「ジョゼフはどうしているのか……もう支度は終わっただろうか」
　隣の部屋で支度しているはずだ。似たような意匠の白い服らしいが、どんな仕上がりなのだろうか。そしてどんな心境でいるのだろうか。
　レオナルドはそわそわと花婿控え室を歩き回った。ズボンが皺になるので、式の前にはできるだけ座らないようにと針子に言われたのだ。着心地が悪くないのでレオナルドにはわからないが、どうやら衣装の補修が間に合わなかった部分があるらしい。針子の一人が、目の下に隈を作った顔を悔しそうに歪めていた。一度も王都に帰らなかったことを申し訳なく思ったレオナルドだ。
　結局、レオナルドは結婚が決まってからジョゼフに会っていない。望めば昨日のうちに一目だけでも会えていたかもしれなかったが、レオナルドは自分の用事を済ませることを優先した。
　ジョゼフと最後に会ったのは半年以上も前だ。
　そのときジョゼフは学院を卒業したばかりで、ユリシーズとアンドリューの両王子主催の夜会で、主役のように振る舞っていた。成績は優秀だったと人伝に聞いた。本人は官僚試験を受けたかったらしいが、父親の反対にあって断念したとか。
　その夜会はおそらく二人の王子がジョゼフの卒業を祝い、かつ励ますための催しだったのだろう。王子の招待を断るわけにはいかず、さらに偶然にも事務手続き上ちょうど王都に帰ってきていた時期だったのでレオナルドは夜会に出席した。
　ジョゼフが出席すると聞いたからではない。会えるかも、言葉を交わせるかもと思ったからではない――。
　十八歳になったジョゼフは会場の中央で両側に二人の王子を侍らせ、優雅に微笑んでいた。
　シャンデリアの光を全身に浴びて、まるで自身が輝いているように見えた。高級な果実酒と贅沢な食材を使用した料理が振る舞われる。着飾った令嬢たちの囁き、終始流れている管弦楽の調べ。
　殺伐とした風景が広がる国境とは、まるで世界がちがう。レオナルドは場違い感をひしひしと感じていたが、早々に帰ろうとは思わなかった。ただ遠くからジョゼフを見ていた。一瞬だけ視線が合ったような気がしたが、それだけだった。その夜、言葉を交わす機会はなかった。あのときの彼は、王子たちのものだったからだ。
　あれ以来の再会が、まさか結婚式とは。
　じわじわと緊張してきて、頭に入れたはずの段取りが飛んでしまいそうになる。
　控え室の扉がノックされ、アシュワース家の使用人が「お時間です」と声をかけてきた。
　一回だけ深呼吸をして、レオナルドは部屋を出た。使用人に案内されて式場となる礼拝堂へ向かう。礼拝堂の扉は閉められていた。中からはざわめきが伝わってくる。両家の親族と招待客が合計百人ほどいるらしい。

緊張しながら待っていると、従僕のスタンリーとともに渡り廊下を白い妖精がやってきた。
レオナルドは息を呑んだ。純白の正装を纏ったジョゼフは、まるで自分とおなじ人間には思えなかった。妖精か、はたまた天からの使いのように、清らかで美しい。白い肌が内側から輝いている。純真無垢に見えた。
ジョゼフはこんなにきれいな青年だっただろうか。いや、もともときれいな男ではあったが、これほどだっただろうか。
絶句して、レオナルドは立ち尽くすことしかできない。
この青年が自分の伴侶になるのが信じられなくて、いまさらながら混乱してくる。
白金の睫毛に縁取られた大きな目がレオナルドを見上げてきた。金色の瞳がひたと見つめてきて、なにか気の利いたことを言いたかったが、思考停止した脳はなにも思いつかず、干上がった喉からは呻き声すら漏れなかった。段取りは頭の中から飛んでいた。
動かないレオナルドに、ジョゼフの目つきがやや剣呑になってくる。スタンリーがすっと音もなく動き、レオナルドの左腕にジョゼフの右手を絡ませた。そして礼拝堂の扉の前に二人を立たせる。
「あの……」
囁くような声でジョゼフが話しかけてきた。レオナルドはちらりと白金の髪に包まれた小さな頭を見下ろす。
「今日からよろしくお願いします」
ジョゼフは前を向いたまま、そう言った。まさかジョゼフからそんな言葉をもらえるとは思っていなかったレオナルドは息を呑んで固まってしまう。
「こんな場所で言うのはおかしいかもしれませんが、結婚が決まってから一度もお会いできなかったので」
なにか返そうとしたレオナルドは、チクリと嫌みのようなことを言われて言葉に詰まる。
「それは……すまない」
「いえ。義父上から国境警備の任務はとても重要で大変なのだと聞きました。中隊長として二百名の兵士を率いておられるとか。お疲れさまです」
「あ、うん、そう、なかなか大変で、抜けられなくて……。すまなかった」
いいえ、とジョゼフがかすかに首を左右に振る。動きに合わせて白金の髪がキラキラと光った。きれいすぎてずっと見ていられる。
父のドナルドが、ずいぶんとジョゼフに対してレオナルドの印象がよくなるように働きかけてくれたようだ。面倒くさがって王都に戻らなかっただけなのに、とレオナルドは父に感謝した。
「お時間です」
スタンリーがゆっくりと扉を開いた。
ざわついていた礼拝堂内の招待客たちが、ぴたりとおしゃべりをやめる。自分たちに視線が集まったのがわかったが、レオナルドは客よりも左腕に掴まっている麗人のことしか意識にない。

しんと静まりかえった人々が、自分たちの姿に感心してため息をこぼしていることなんか、まったく気づかなかった。

◇

浴室で体の隅々まで洗い、あらぬところまで清めた。
ジョゼフは薄手のローブ一枚を纏い、夫婦の寝室で一人佇んでいる。
緊張のあまり手足が冷えてきた。下着をつけていないので下半身がすぅすぅした。それで余計に足が冷えて感じるのかもしれない。
両手を擦りあわせるようにしていると、左手薬指にはめた指輪に意識が向く。結婚指輪だ。ジョゼフの髪色に似た白金の金属の輪に、小さな金剛石がひとつだけ埋まっている。可愛らしい指輪だ。レオナルドの指にもおなじ意匠のものがはまっている。
結婚式でおたがいの指にはめあった。招待客たちは静まりかえり、じっと見つめられているせいか緊張した。レオナルドもそうだったのか、かすかに指が震えていたように思えた。
大丈夫、レオナルドだって普通の人だし優しいところがあるはず――そんなふうに思いながら寝台横に置かれた長椅子に座っていたジョゼフだが、じっとしていられなくてうろうろと立ち歩いた。
そこに小さなノックの音が響いた。ギクッとしたジョゼフだが、すぐに叩き方で自分の従僕だとわかる。予想通り、スタンリーが入室してきた。
「ジョゼフ様、お飲み物をお持ちしました」
彼は初夜を控えてあまりにも主人が落ち着きをなくしているので、酒を持ってきてくれたのだ。ジョゼフは長椅子に戻り、甘い果実酒を湯で薄めてあるものを受け取った。ゆっくりと飲むと、体がぽかぽかしてくる。冷えていた手足に熱が戻ってきた。
「レオナルド様はさきほど湯浴みに入られたそうです」
そうか、と頷く。
挙式のあと、食事会があった。レオナルドは親族や招待客たちから酒を勧められ、かなり飲まされていた。頑丈そうな体格をしているから、見かけ通りレオナルドはずいぶん酒に強いらしい。ジョゼフはにこやかに微笑みながら、主に親族からの祝いの言葉を受けていただけだ。
食事会が終わったあと、レオナルドとジョゼフは新居に移動した。レオナルドの父ドナルドが用意した邸宅は、かつて貴族が別邸として建設したという瀟洒な建物で、さほど大きくなくて住みやすそうな家だった。家具はすべて新調してくれたという。使用人を揃えたのもドナルドだ。ジョゼフとスタンリーは一週間ほど前に彼らと顔合わせをしており、自分の荷物の運び入れの際などに言葉を交わすようにした。おかげで少しは打ち解けたように思う。これから長い付き合いになるのだから、使用人たちとは仲良くしていきたい。

肝心のレオナルドとは仲良くできるだろうか――。
それを考えるとジョゼフはまた手足が冷えそうになる。初対面は三年も前だが、そのあいだに顔を見たのは片手ほどの回数しかない。毎回、言葉を交わしたわけでもなく、今日ひさしぶりにレオナルドを間近に見て、あまりの体格のよさに驚いた。もしかして鍛え続けているせいで、体が大きくなっているのかもしれない。
男がだれでも憧れるような立派な体格に、純白の騎士服を纏っていた。婚礼に際し、腰に剣を佩くことができるのは騎士だけだ。礼拝堂の扉の前でレオナルドと向かいあったとき、ジョゼフは純粋に格好いいと思った。悔しいが格好いいと。
そんな感想を抱いたのはジョゼフだけではなかったようだ。開かれた扉から礼拝堂へ入ったとき、招待客たちから感嘆のため息が漏れた。視線はレオナルドに集まっていたように思う。凛とした表情と騎士らしさ全開の立ち姿に、みんな釘付けだった。そのときはちょっとばかり鼻が高かった。
誓いのくちづけをしたときも、誇らしい気持ちがあった。レオナルドの唇は乾いていて、とても柔らかかった。指輪をはめたときは、頑丈そうな大きな手に驚いたけれど。
食事会のあいだも、「お似合いだ」「立派な騎士様だ」と親族に言われて、ジョゼフは素直に頷くことができた。
根っからの軍人であるレオナルドとどう暮らしていけばいいのかとずっと不安だったが、彼の落ち着いた様子に頼もしさを感じた。
だがしかし、日が暮れて新居に移ってきたころから、ジョゼフは初夜が心配でならなくなってきた。あんなに大きな体のレオナルドなのだから、一物も大きいのではないだろうか――と。
「スタンリー、やはり事前に訓練しておくべきだったな……」
弱々しい声でぽつりとこぼしたジョゼフに、スタンリーは「いまさらなにを」と呆れた口調で返してきた。
レオナルドとの結婚が正式に決まり、挙式と新居の準備がはじまったころ、性経験がまるでないジョゼフのために、スタンリーは男性同士の性交のあれこれをジョゼフに教えてくれた。もちろん実地ではなく、どこからか教本を仕入れてきて。
それは寂しい独身男性が自身を慰めるために想像を膨らます助けになるような本で、精緻な絵が添えられていた。男女の絵が多かったが、男同士も女同士もあった。ジョゼフは一目見ただけで頭がくらくらした。
「レオナルド様は軍隊生活が長いですし、ジョゼフ様よりも十歳も年上ですからそこそこの経験はおありだと思います。しかし夫婦の営みとは共同作業のようなもの。すべてを相手任せにせず、一応はこちらも準備をしておいた方がよろしいかと思います」
スタンリーはそう言って、とある専門店で購入してきたという淫具を出してきた。男性器を模した木製のそれは、細いものから太いものまで五種類あった。潤滑油が入った瓶まで並べられた。
せっかくのスタンリーの気遣いだったが、ジョゼフはそれらを使わなかった。単に怖かったの

だ、異物を直腸に挿入することが。
「きっと、なんとかなる。なんとかなるさ」
　自分に言い聞かせるようにそうくりかえすジョゼフに、スタンリーは「いいえ」と首を横に振った。
「ジョゼフ様、人間のあの器官はそもそも性交に使用するためのものではありません。少しでも慣らしておいた方が、あとあと楽になります」
　そう心配するスタンリーに、いつかその気になったら使うから、と捨てることをせずに洗面用具の場所にしまった。いまになって事前に訓練しておけばよかったと後悔している。
「ジョゼフ様、緊張なさっていますね」
　スタンリーに嘘はつけない。ジョゼフは頷いて、空になったカップを手渡した。
「どうしよう、おまえの助言を聞いておけばよかった。絶対に、なんとかならない。私は今夜、どうなるのだ？」
　怖くて涙が滲んでくる。これが愛しあっている相手ならば期待に胸を膨らませる場面なのだろうが、とてもそんな心境にはなれない。俯いたジョゼフの前にスタンリーが膝をつき、顔を覗きこむようにしてきた。
「ジョゼフ様、もしレオナルド様のなさることに対して身の危険を感じたら、ためらうことなく私を呼んでください。お助けします」
「いいのか？」
　そんなことをしたら、スタンリーがレオナルドの不興を買ってしまう。
「私のことなど気になさらないでください。大切なのはジョゼフ様の心と体です。私は身を賭してあなた様をお守りすると決意しておりますから」
　励ますようにスタンリーが力強く言ってくれる。逃げ道を用意してくれた従僕には感謝しかない。
　もしかしたら今夜はなにもしないかもしれない――とジョゼフは希望を抱いた。
　今日は早朝から支度をして式を挙げ、食事会でたくさんの人に会い、とても疲れている。たぶんレオナルドも疲れているだろうから、今夜はなにもせずに眠りたいと言えば寝かせてくれるかも――。
　レオナルドとはまともに会話をする暇がなかった。彼がもし、ジョゼフの悪い噂を耳にしていたら、男に抱かれ慣れていると勘違いしているだろう。そのあたりのことも彼に確認したかった。
（まずは話だ）
　そう心に決める。
　そのとき、ノックもされずに扉が開いた。そこに立っていたのは薄手のローブ姿のレオナルドだ。逞しい肉体がローブの生地を盛りあげている。明かりを抑えている寝室の中、陰影の影響か彼は昼間よりも大きく見えた。
　スタンリーが無言でジョゼフから離れ、静かに退室していく。閉められていく扉に、ジョゼフ

は衝動的に縋りつきたくなった。だが実際は、自分に歩み寄ってくるレオナルドから視線を外すことができない。
　今日、夫となった男は、熱っぽい目でジョゼフを見つめてきた。ヤル気が漲っているのが一目でわかる。長椅子に座ったままのジョゼフの手をぐっと握ってきた。なめし革のような手のひらの感触だと思った。おそらく剣の鍛練を重ねて、手の皮が厚くなっているのだろう。
　左手の薬指には、結婚指輪がはめられている。ジョゼフのものとおなじ意匠だ。
　レオナルドは無言のままジョゼフを立たせ、寝台に促した。端に座らされたジョゼフは、正面に立つレオナルドに「あの」と勇気を出して話しかけた。
「少し、時間をもらえませんか」
「なんの？」
「話をしたいのです」
　ふっとレオナルドが鼻で笑った。馬鹿にしたように。
「新婚初夜の寝室で、いったいどんな話をする必要がある？」
「わ、私たちは、いままで挨拶ていどしか会話をしたことがありません。お互いをよく知るためにはもっと会話が必要だと思います」
　上から目線のレオナルドに苛立ちを感じたが、ここでジョゼフが激高してはいけないと自制する。
「そんな必要はないだろう。体を重ねれば言葉では理解できないこともわかるというものだ。肉体の方が雄弁だと思うが？」
　そういう説もあるかもしれない。けれどジョゼフは経験がないので本当にそうなのかどうか知らないし、そもそもの段階の話をしたいのだ。
「でも、あの、私は……」
「俺が相手では不満なのか」
　レオナルドが声を低くした。怒りの気配にジョゼフは身を竦ませる。こんな体の大きな男と二人きりで寝室にいるという事実を、あらためて恐ろしく思った。
　大きな手が伸びてきて、ジョゼフの髪に触れた。反射的にびくっと全身が揺れてしまう。
「怖いか？　俺が」
「……いいえ」
　嘘をついた。末永く寄り添わなければならない夫に向かって、正直に怖いとは言えなかった。
「ジョゼフ、俺たちは夫婦になった。これから何十年もともに暮らしていかなければならない。俺を受け入れろ。そうすれば大切にしてやる」
　はい、と頷く。レオナルドもジョゼフと同様に、王家主導のこの結婚を拒めなかったのだ。さらに離婚も許されないと覚悟している。二人はおなじ考えだと知ることができて、ジョゼフはその点だけは安堵した。
「ジョゼフ……きれいだ」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」
https://www.fwinc.jp/daria/